

ヤゴを飼う (つぶやきに視点を当てて)

品川区立平塚幼稚園 (東京都品川区)

[5歳児]

幼児のつぶやきの要素を **発見** **イメージ** **疑問** **予測・予想** の4つに分類し、この視点から幼児のつぶやきを分析する。

<事例> ヤゴとの出会い〜ホントにトンボになるの? (6月上旬)

同一敷地内の小学校のプールで1、2年生がヤゴ捕りをしていた。「幼稚園の子たちもどうぞ」と声をかけていたことをきっかけに、プールサイドへ行く。いつもお世話になっている用務主事さんがプールの底からすくいあげた泥の中に、小さく飛び跳ねるヤゴを見つける。タライにいっぱい小型のヤゴと、大きなヤゴを3匹もらって、幼稚園で育てることにする。

(ヤゴを見つけて)
「いたー! すごい
たくさんいる!」
「こっちの方が大
きいよ。これはヤ
ゴのお父さんだ
ね」
「こっちの小さい
のは赤ちゃんだよ」
イメージ

「ヤゴがいたよ」

(ヤゴを手のひ
らにのせてみる)
「なんだかす
ぐつたいよ」(手
のひらのヤゴに
向かって)
「動かないで!
じっとして!」
(内心ドキドキ
...) 発見



(タライの壁面に、ヤゴ
の抜け殻がいくつも付い
ていた)
「すごいね、ヤゴって。
どうやってこんな壁を
登ったんだろう?」
「落っこちないのか
な?」
「枝がなくても羽化でき
るんだね。どうしてか
な?」
「足の力が強いのか
な?」 疑問

「ホントにトンボになるのかな?」

幼児の作った壁面のアジサイ
に、羽化したトンボが止ま
っていた。
「先生! こんなところにト
ンボがいるよ〜!
みんなの作ったアジサイ、
ほんとお花だと思っ
たんじゃない?」
(トンボに向かって)
「そこには蜜はないですよ
〜」
「トンボもお花の蜜が好き
なのかな?」 予測・予想

<事例> ヤゴの羽化〜ギンヤンマを見つけるまで (6月下旬)

ギンヤンマが羽化した。保育室の窓のサッシのすき間にいたギンヤンマを、小さな飼育ケースに入れてアゲハチョウの飼育ケースの隣に置いた。たまたまその朝、アゲハチョウも羽化していて、幼児の視線はまずチョウに集まった。ギンヤンマの飼育ケースに立てた木の枝には、大きな抜け殻が付いていた。チョウの羽化に沸く横で、後から登園してきた幼児が、先に抜け殻を見つけた。

(今まで見たこ
とのない大きな
抜け殻を見て)
「すごい... こ
れ、何?」
「セミの抜け殻
みたいだね」
「ていうこと
は、トンボにな
ったの?」
予測・予想



(トンボという声
が聞こえて チ
ョウの横にある
飼育ケースを見
つける)
「あっ! トンボ
だ(びっくり)」
(大勢集まる)
「うわ、大き
い!」
「こんな大きい
トンボになっ
たの? ヤゴよ
り大きいよ」
発見

男児が二人、昆虫図鑑でトンボ
の名前を調べ始めた。虫めがね
で、トンボと図鑑の絵を見比べ
ている。
「ねえ、このギンヤンマって
うのに似てない?」 「本当だ、
きつとギンヤンマだね」
保育者「どうしてギンヤンマだ
と思うの?」
「お腹の色と、羽根の色が同じ
だから」
(虫めがねで見て) 「胸のとこ
ろと、手と足の形も同じだよ」
「ねえ、ヤゴも体が赤いよ」「そ
うだね」 「先生、やっぱりギン
ヤンマだよ」 発見

飼育ケースの中で、羽化した
ギンヤンマが小刻みに
羽を動かしている。その振
動が飼育ケースの底から
手に伝わってくるので、5
歳児全員がその振動を感
じてみる。
「すごいブルブルしてる。
寒いんじゃないのかな?」
「これから空を飛ぶため
に、エネルギーためてい
るんだよ」
「飛びたくて、練習してい
るんじゃない? 逃がして
あげようよ」
予測・予想

<考察>

- ・子どもたちとヤゴの出会いは衝撃的であった。泥の中で跳ねているヤゴを見た時には、すぐに手を伸ばせる幼児は少なく、主事や保育者が掌に乗せてやることで少しずつ親しみを感じるようになり、最後には全員が泥の中からヤゴをつかめるようになった。
- ・幼児は毎日飼育ケースやタライをのぞきこみ、餌を食べる様子や、共食いも見てきた。小さなヤゴの体から、すっきりと伸びた羽や腹のトンボが出てくることを、疑問に感じてもいるようだが、言葉にならない。それよりも、生まれてきたことに感動している様子であった。



みどころ

子どもたちの“つぶやき”に着目して分析することで、ヤゴの飼育やかかわりを通して体験していることを、保育者は細やかに理解しています。“言葉”や“やりとり”ではなく、“つぶやき”としていることから、かかわりや表現だけではない、幼児期らしい言葉“内言”を意識することができます。保育者が“つぶやき”を大切にすることで、はっきり表現できないあやふやなことでも子どもたちは声に出すことができるようになります。そして、子ども同士もそうした言葉に反応するようになり、次第に互いの思いや考えが明らかになっていき「科学する心」が育まれていくことが期待できます。